

「譬へば人有り。猛毒薬を以て太鼓に塗り、衆生の中に響つて声をおこさしむ。心に聞かんと欲することなしと雖も、之れを聞けば皆死す。唯だ一人の不横死の者を除くが如し」
 私等は臆病にして、自己の幸福製造のためか、もしくはお題目を聞かんと欲する順様の人のためにのみ、お題目を唱えております。しかるに一般のお題目を聞かんことを欲せざる逆縁の者のためには、広く一切衆生のためにはお題目を唱うることを躊躇いたします。
 もしこれを聞くものは腹を立てて悪口を吐き、あるいは杖木瓦石を握るかも知れない、そういうことを恐れるからであります。われわれの臆病心を励まして、われらとともに、お題目を逆縁の衆生の耳に入れる勇猛なる助け人が、すなわち毒鼓の妙用であります。

増上慢の四衆が口を揃えて不輕菩薩を悪口罵せし言葉の中に、「是の無智の比丘、いづこより来る」という一句があります。

御義口伝に、

「今、時すでに末法に入って、日蓮と共に南無妙法蓮華経と唱え奉るものは、無智の比丘と誇せられんこと、経文の明鏡なり。」

「無智を以て法華経の機と定めたり」

と仰せられました。當にお題目ばかり唱えておれば、きっと、この無智の比丘と罵られるこど、まことに経文の明鏡であります。私もこの一句は深く体験色読いたしました。

(三大秘法管見 四八七頁)

- 6 -

聖城

高祖日蓮大聖人第七百年御遠忌法語

於 清澄山日本山妙法寺根本道場
仏紀二五二五太歲辛酉年四月二十七日

南無妙法蓮華經

核軍備競争論者の間に近日、聖域という言葉が呼ばれる。

聖域とは神聖なる区域といふ熟語の省略であるのか、そもそも神聖などの文字は唯物論には無用である。況や殺人破壊専門人夫の軍隊の口には、神聖などの言葉があつては、その職業は成り立たない。神圣などの文字は唯心論者、特に宗教道德の社会に於いては、その社会の中心生命となるもので「神聖」の一宇を離れた宗教もなければ倫理もない。

「地球上のいかなる国も今日のアメリカ合衆国より強くはない。又将来に於いても、いかなる国もアメリカ合衆国よりは強くはならないであろう。これこそが合衆国が受け入れる事ができる唯一の国防態勢である」とアメリカの大統領はいう。

初めソ連は劣勢の地位から出発したが次第に配備及び生産される核兵器の全般的殺傷能力の点で対等

- 7 -

の所へ向つて前進した。

もしソ連の指導者が何等かの理由で、或いは何等かの間違った情報の結果としてアメリカを一国家として破壊する事を撰んだならば、三十分以内に疑いもなく破壊し尽くす事が可能である。

それを妨ぐる為に合衆国のはじ得る事は全くない。アメリカが為し得ることは、ソ連に対し同等の恐る可き報復を為し得る事だけである。

勿論、逆にアメリカがソ連を破壊せんとした場合にも同じである。

核兵器の全面戦争が起つた場合に、勝利を得んともくろんで来たソ米両国の双方にとって核兵器による危険の増大に自ら驚かざるを得なかつた。

ここに於て彼等の関心は限定戦争の立案に向けられた。

限定戦争とは、現在ソ米両国が秘蔵せる戦略的核兵器は双方互に相手国に対しては使用しない事にする。そこでソ米両大国の国土は安全となる。これを聖域といふ。もし核戦争をするとなれば弱小国の領土内に限つて戦う可きである。戦争の起る唯一の原因は未だ確認されたわけではないが、多分ソ米両国の紛争から発生するであろう。

核兵器全面戦争の場合、ソ連と米国とは聖城として一時は安全を保つ事が可能かも知れない。然し、その聖城安全は一場の夢と消え去つてソ米両国共に核兵器の灰となることは必定であらう。

- 8 -

そもそも核兵器特に戦略核兵器の開発競争は、ソ連は米国を、米国はソ連を相互に信頼する事能はず互いに猜疑し恐怖し憎悪する心情から起つたものである。もしソ米二ヶ国だけの世界となれば、ソ米の対立感は一層深くなるが故に、その結果決戦とならざるを得ない。

核兵器は疑いもなく、人類を全滅せしむる大罪悪器であるし、此の大罪悪の兵器を開発し、蓄積し使用する事に競争せるソ連とアメリカは双方共に核兵器の危難を免がるる方法を発見して、これを聖城と名づけた。是の如き聖城は真に世界万国全人類の誰れもが求めてやまざる処である。聖城の発見は、ソ米両国の指導者が会談し、合意したというただそれだけであった。

そこで核兵器を持たぬ他の弱小諸国も亦聖城を発見せんか為に、会談し合意を求めねばならぬ。ソ連と米国とは各自の国土を聖城として安穏ならしむる事に満足し歎嘆するであらう。然し、他の核兵器を持たぬ弱小諸国を滅ぼせしめ荒廃せしむる悲惨の状態に対しても亦満足し、歎嘆するであらうか。

もしソ米両国が全世界の国土を聖城となす事に満足し、歎嘆し、希望するならば、それは容易な事で、直ちにできる事である。即各自が開発し、蓄積せる諸の核兵器を絶対に使用せないと決心するだけで、それで充分である。そうすれば世界人類は、一切皆安穏の想に住して歎嘆する事ができるであらう。全世界の聖城には、ソ米は満足し歎嘆する事はなぜできないか。

- 9 -

宗教は總じて聖域を求め、聖域に往かん事を求むる。聖域を或は淨土と称し、或は天国といふ。然るに此地上には五逆十惡にして淨土も天国も、何處にも見出されないのが実状である。それでもなお、失望する事なく淨土、天国を求めて止まざるが故に、結局死後には是を期待するに到つた。

然るに日蓮大聖人の立正安國を標示したる宗旨は、件の聖域を死後に求めず現世に求めた。

『衆生の心汚るれば土も汚れ、心清ければ土も清じて、淨土と云ひ穢土と云ふも土に一つの隔無し。只我等が心の善惡に由ると見へたり。』（一生成仏鈔）

守護國家論に曰く

『法花經二十八品の肝心たる寿量品に曰く、「我常に此娑婆世界に在り。」又云く「我常に此に住す。」と亦云く「我此土は安穩なり。」と。此文の如くいは本地久成の円仏、此世界に住せり、此土を捨てて何れの土を願ふ可きや。故に法花經修行の者の所住の処を、淨土と思ふ可し何ぞ煩しく他処を求めんや。故に神力品に云く「若是經卷所住の処、若是園中に於ても、若是林中に於ても、若是樹下に於ても、若是僧房に於ても、若是殿堂に在ても、若是山谷曠野に於ても、乃至當に知る可し是処は即是道場也」と。

涅槃經に云く、若善男子、是の大般涅槃微妙の經典の流布する処は、當に知るべし、其地は即是金剛、是中の諸人も亦金剛の如し。已上

- 10 -

法花涅槃を信する行者は、余処を求む可きに非ず、此經を信する人の所在の処は即淨土也。』

日蓮大聖人の所謂聖域、則淨土、天国とは、我等が住む此國土、山谷、曠野、園林、堂閣總て皆聖域である。「衆生却尽きて大火に焼かるると見る時も我此土は安穩也」と、法花經に説かれてある。此經文をそのまま信するが故である。

此經文を信する時、我々は飽く迄、失望落胆する事なく、如何なる核兵器の脅威の中にも、必定して教い護らるるという、金剛の如き信念を確立して、殺傷破壊の戦争手段を採用する事なく、ソ米両国の人々の心を転換して、平和に向わしむる為に、奮闘するであろう。世界平和の建設は所詮精神問題である。

「宗教運動は、まだ和平の創造や、戦争準備に対する反対という点で、充分の影響力を持つに至っていない。」

此様な無闇心で、悲しく余りにも期待も出来そうでないのが、一般の現状である。人々や大衆運動、組織、政党、そして最後に政府のこうした不幸の消極性は、どのようにすれば変り、現実的で、理性的な闇心が持たれるようになるだろうか」という、宗教者に対する批判の声があがつた。

元来宗教といふものが精神問題、自己内心の憂悲、苦惱の解決に偏向して、それ故に自然と外界の現

- 11 -

象に疎遠になる。

日蓮大聖人の立正安國論が、宗教者に信用されなかつたのは、往年鎌倉幕府のみならず、今日の我々にとつてもそつである。そこに現在宗教運動の不振の原因があり、非現実性がある。一心法界、万法唯心と説く大乗仏法によれば、外界の現象の一切が則心法である。外界の現象以外に心法などを求む可きではない。

今日もし核兵器の危難を阻止する事能わざして、ひそかに一身の安堵を計るが如きは、夢の又夢である。須く宗教者は目ざめねばならぬ。

近代文明は科学文明といはれる。全世界の科学の研究開発に従事する約半数の者、四十万人の科学者、及び技術者が、先進国の軍事研究に雇われている。又直接的乃至間接的に、軍事目的の仕事に従事している人間の総数は、実に五千人とみなされている。此等の人々の豊富な生活、名譽ある地位を保たんが為に、核兵器は逐次開発されてゆく。その開発された核兵器が人類の為に、如何なる災禍をもたらすかに就いては、全く無関心であり、無責任である。

宗教者の無能よりは、科学者の無反省が遙かに悪い。

立正安國論は「娑婆即寂光」と説く。娑婆とは穢惡充満し、三災、七難纏い起る處である。寂光とは清淨微妙にして、安穩快樂の處である。現実世界の穢惡を指して、直ちに清淨というのではない。いか

- 12 -

なる穢惡をも転すれば、則清淨となる。必ず転する事が出来るという事が、それが娑婆即の即である。

宗教の活動は即寂光という即の字の実験である。

清澄山は聖域である。

日蓮大聖人が、十一歳にして入山遣はされた、これが第一の聖域の建設。統いて十六歳にして、道善房に就いて出家遊はされた。これが、第一の聖域の建設。

「仏法をなはん者は、父母、師匠、国恩を忘る可しや。此大恩を報せんには、必仏法を習ひきわめ、智者とならでは叶ふべしや」とて、清澄寺の本尊虚空藏菩薩の前に、大誓願を立てられた。これが、第三の聖域の建設。

建長五年四月二十八日、清澄山の旭ノ森と称する一角に立つて、初めて南無妙法蓮華経と高声に唱え出された。

如来滅後一千一百一十余年が間一人も唱へず、日蓮一人、初めて南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経と、声も惜しまず唱ふる也」と、いわゆる日本仏法の開宗宣言である。これが、第四の聖域の建設。

開宗宣言の直後、地頭等の怒りに触れ、清澄山を連れ出で給いしより、一期生の間、再び清澄山へ登らせ給う機会はなかつた。

日蓮大聖人の御心は、御一代、清澄山を離るる事なく、清澄山に住まわれた、御一代の御文書四百余

- 13 -

篇が編集されてある。その最初の御述作「戒体即身成仏義」がある。題号の下、御署名の上に、「清澄山住人」の文字がある。他の御書には絶えてなき所である。

又善無畏三藏鉢に、「而るに日蓮は、安房国東条の郷、清澄山の住人也」と記された、日蓮大聖人の清澄山に対する聖域建設は、此の如くである。

日蓮大聖人御入滅已来七百年を過ぎた。代は正に闘争堅固の時代となつた。此所、彼所に、諸国首脳会談が開かれる。どれも皆悉戦争の会談計りである。

清澄山は聖域として、日本第一の大杉が育つた。近年白亜の大宝塔が地より湧出して、空中に聳え立つた、仏殿が建立されて、末法の闇を照らす、闇浮提第一の本尊が奉安された。天蓋、瓊珞、幢旛が懸かり、香花灯明が供えられた、これ等は皆娑婆の林野を変じて淨土の風光を現わし、世界を聖域に転ぜしむる発端である。

是時宛も高祖日蓮大聖人、七百遠忌に当り、全世界の宗教者の代表、世界平和の指導者、核戦争反対の男女が集会して核兵器全廃、軍備全廃の方策を探求し、もつて全世界聖域、則娑婆即寂光、立正安國、現世安穏を実現せしめんことを企てた。暴力万能の絶頂に達したるその暴力を転換して、人類生活の為の資料と為さんとするものである。

暴力が勝つか、核兵器が勝つか、唯物論が勝つか、もしそれが勝った時には、人類は全滅する。

- 14 -

非暴力が勝つか、宗教、道德が勝つか、礼拝、供養が勝つか、唯心論が勝つか、もしそれが勝った時に、人類は現世安穏の証人となる。

高祖日蓮大聖人の大慈悲広大ならば、已に起れる人類全滅の大惡を転じて、人類生存の大善と成らしめ給え。

南無妙法蓮華経。

諸仏教世者、大神通に住し給ふ

衆生を悦ばしめんが為の故に

無量の神力を現じ給へ。

南無妙法蓮華経。

- 15 -